

《中心》のシンボリズムの形而上学的意味をめぐって

序 文

今日の宗教学界では、《中心》のシンボリズムは特にミルチエア・エリアーデの業績により、《古典的》課題となったが、それは決して全てが論じ尽くされたことを意味していない（実際に、エリアーデ自身はこの点に関しては暗に認めていると思われるⁱ）。否、この課題はそれ自体が尽くしがたいものであるだけに、様々な伝統における《中心》の表現や解釈については論じられるべき点が多く残されている。本論文は《中心》のシンボリズムについて、これまであまり論じられてこなかった幾つかの様相を明確にせんとする試みである。

エリアーデが《中心》のシンボリズムは主として以下の概念を包含すると述べている。

- i. 世界の諸段階（諸界）が繋がっている場。
- ii. 天地創造が始まる点、そこからのみ創造が始められ得る点。
- iii. ヒエロファニー、及びそれによるすぐれて実在の場ⁱⁱ。

iv. イニシエーションによって達せられる究極点、即ち《不死》、或いは絶対的実在としての自己の《中心》³。

さらにエリアーデは《中心》のシンボリズムとしての建造物の理論を特に展開するが、それは次ぎのように要約できる。

あらゆる建造物は天地創造の反復であり、《中心》から始められた天地創造に倣って、その基礎を《世界の中心》に置く。従ってあらゆる聖なる場——寺院、宮殿、聖都など——は《世界の中心》（臍、心など）に位置し、そこを貫く《世界の軸》（聖山、《世界の樹》など）によって諸界の《中心》に繋がれている⁴。

以上を見れば、《中心》のシンボリズムが多様の様相を包含し、あらゆるシンボリズムと同じく、これを一つの定義の枠内に納めることは不可能であると思われる。しかし、各様相、概念を支え、正当化する全てに共通して有効な意味を持つからこそ、それが一つのシンボリズムのもとに現され得る。エリアーデが「《中心》の根本的、厳密的な意味」について語るときには正にこの意味を示唆しており、彼はそれを「絶対的実在」に求める⁵。

エリアーデは又、《中心》が「すぐれて聖なる場」、「最高度の美的点」、「實在の心」、「超越的《空間》」、「天地開闢に先立つ無時間的瞬間の場」、「感性界が超越され得る場」、「永遠なる無時間的現在〔*time stands*〕」が得られる場」などを意味するとも述べる。⁶⁾しかしここに今述べた多くの表現の内容を一括する一つの、より明確な表現はないであろうか。又、如何に他の表現より、正に《中心》がこれら全てを意味し得るのだろうかという問いが当然生じる。

本論文の第一の目的は、この問いに答えることであるが、それが形而上学的見地に立たない限り不可能であることは、エリアーデの用いている表現から直ちに明白である。第二の目的は《中心》が持つ意味の分析を通じて聖なる・宗教的シンボルの特徴、とりわけこのようなシンボルが人間の恣意に基づく取り決めではなく、シンボル自体の本性から生じたことを明確にすることにある。

1. 前置き

i. 《中心》が持つ形而上学的意味についての考察を進めていくには先ず、形而上という語がここではどういう意味で使われるか、或いは又、形而上の領域が持つ属性、正に《中心》がシンボル化する属性はどういうものかについて簡単に述べる必要がある。

本論文では形而上という語それ自体は、アリストテレスに代表される、とりわけ新プラトン派及びスコラ哲学がいう意味で使われるが、この語それ自体より重要なのは、それが示すもの、即ち形而上の領域が持つ属性そのものである。従って形而上という語は他の思想、以下に述べてゆく属性は認められる限りにおける思想にも

当然あてはまるものである。

本来、西洋哲学では形而上学 (*metaphysica*) は、文字通り《自然界の向こうにあるもの》、或いは《自然界を越えるもの》、言い換えれば現象界の存在様態と異なる《存在》様態を持つものを対象とする。従って最終的には形而上の領域とは、制約を持たない、つまり自然界が様々な制約(空間、時間など)のもとにある存在様態であるのに対し、形而上の領域は、必然的に如何なる制約のもとにも置かれていない《存在》様態なのである。

自然界を支配する制約のなかで根本的ともいえるのは《形》である。なぜなら、自然界を特徴づけるのは有限な、又は個別的な(部分としての)存在であるが、それを限定するのは、正に《形》であるからである。⁸⁾これに対し形而上の領域は《形》のもとに置かれていない故、無形なる、個別化不可能(部分なき)《存在》様態である。

中国語と日本語の、*“metaphysica”* に対応する語は形而上であるが、この語は *“metaphysica”* と比べた場合、遙かに適切にその内容を表現していると言えよう。なぜなら、形而上とは文字通り《形を持たないもの》を意味し、従って無形なるもの、又、個別化不可能ものを直接に意味するからである。

形而上の領域は時間の制約を受けないので、変化すること―変化は時間的連続を前提とする―もない。従って、それは無時間的、言い換えれば《永遠なる現在》という意味で永遠である、本質的に不変の《存在》様態である。

以上より、そして簡単に言えば、形而上の領域とは、無限、無形、

個別化不可能、無時間、永遠、不変という属性を持つ《存在》様態であり、存在原理（形而上）の《一》《名を持つ道》、アトウマン、一者としての至高神など）がそれを代表する。

ii. 本論文は聖なる・宗教的シンボルについて考察を行うのであるから、私の理解する限りで、こう言ったシンボルの定義と、その特徴のなかで特に次の二つを述べておきたい。

聖なる・宗教的シンボルとは、或る物・イメージ（自然物、現象、人間による表象―造形物、動作、言葉、音―など）であるが、その本性に基づいた対応関係（アナロジー）によって、感覚および理性によって直接に把握することがより困難なもの、或いは全く捉えられない或る実在を表現するものであると言えよう。このようなシンボルの重要な特徴は、物・イメージとしてのシンボルと、それによってシンボル化される実在との間には、それぞれの本性に基づいた或る対応関係（アナロジー）が存在することにある。但し、シンボル化される実在が形而上の領域に属する場合には、この実在を示す表現と、そのシンボルである物・イメージとの関係は、単なる対応関係に限られず、《逆の対応関係》が存在する。例えば、これは全て形而上の領域での語であるが、最大のもの、最初のもの（論理的前後関係での）、上を向いて立つものは、それぞれ最小のもの、最後のもの、下を向いて立つもの（逆立ちをしたもの）として、換言すればそれらの《逆の反映》を象徴するシンボルで現される。

2. 《点》としての《中心》のシンボリズム―存在原理―

《中心》のシンボリズムを考察するに当たり、その最も単純な形

態である《点》のシンボリズムの分析から始めたい。数学の定義上の中心は円周を前提とするが、中心そのものはただ単に幾何学点である。従って、以下に《点》のシンボリズムについて述べてゆくことは《中心》のシンボリズムにも適用される。ここでは《点》のシンボリズムに関する、先ず最初に道家思想で見られる幾つかの例をあげ、後にそれを分析してその意味を考えてみよう。

(1) 夫れ道は大において終（おわ）らず、小において遺（この）さず。故に万物備わる。（道は）広広として容れざる無きなり。

（莊子『天道篇』）

（全てを包含して余りあるものであり、無限である《道》は、その形而上の様相は《大》として、その形而下の様相は《点》のような小さい反映、《小》として表現される。）

(2) 六合を巨（大）と為すも、未だ其の《道》の内を離れず秋豪（秋の獣の毛先）を小と為すも、これを待ちて体を為す。（莊子『知北遊篇』）

《道》は六方向、即ち空間、全存在のイメージとしての空間を包含している。如何なる存在物、《点》のような小さい存在物でさえもそれによるものである。）

(3) 道の常は無名なり。朴は小と雖も、天下に能く臣とする莫し。（老子 三十二章）

（永遠の、不変の《道》は、それに際限を与えず命名することはできない。天下から見たその反映は朴、部分を持たない点のような小さいとはいっても、それは《道》のあらわれとして《道》だけに従属し、天下の誰もそれを従属させることはできない。）

(4) 朴は散すればすなわち品となる。(老子 二十八章)

《道》の形而上の様相は部分を持たない《朴》のようであるが、その形而下の様相は、多性のもとにあるという意味での《散》すれば、部分としての個別的存在、《器》となる。

(5) 其の(一)の全なるや純(粹)として朴のごとし。(淮南子『原道訓』)

(形而上)の《一》、即ち存在原理としての《道》は原理の様態において全存在を包含しているという意味での《全》である。そしてこの様態で全てを含んでいるにもかかわらず、部分をもたない。

これらの文章では見られるように、《道》は《大》と《小》によって表現されている。こうした《二重》の表現は《反対の一致》とされるが、《大》と《小》が《反対の一致》をなすためには、両者も同時に形而上の領域においてのみ考えるべきということを忘れてはならない。この場合を別にして、このような《二重》の表現は《道》が持つ二つの様相、その二つの異なった存在様態を示すものとして考える他ならない。即ちそれ自体として、《常》の、不変の《道》、又、《万物》の原理としての《道》は「大」(1)、「巨」(2)「散ざれていない朴」(4)、「無名の朴」(老子 三十七章)、「朴」、「一」(5)などというイメージ、《万物》の立場から見た《道》は「小」(1)・2)、「小朴」(3)などというイメージによって表現されている。まとめて言い換えれば、《大》というようなイメージは《道》の形而上の、そのあらわれない様相、《小》というようなイメージは逆の対応関係によってその形而下の、あらわれた様相を表現する。

他の伝統においても同じシンボリズムが十分に見られる。

インドの伝統では既に『アタルヴァ・ヴェーダ』(10. 8. 25)に次のような例がある。

唯一物(最高原理)は毛より細く、唯一物は目に見えざるがごとし。しかし我が愛するこの神格は、万有よりも広闊なり。¹²⁾

又、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』(3. 14. 3)は次のように言う。

アトウマン(存在原理)は米粒より小さい、大麦の粒より小さい、芥子の粒より小さい、粟の粒より小さい、粟の粒の中の胚よりも小さい。しかし一方でそれは地より大きく、中空(中界)より大きく、天より大きく、さらにこれを併せたものより大きい。

上記の表現は又、『福音書』の次の言葉を思わせる。

神の国はあなた方の内にあるのだ。(ルカ 17. 21) 神の国を何に例えようか。それは芥子の種のようなものである：地上のどんな種よりも小さい。(マルコ 4. 30-31)

以上のことからして、次のように言える。

幾何学点とは、逆の対応関係により、存在原理のシンボルである。そして数の一が存在原理をシンボル化するときは、存在原理は形而上の《一》と見なされるのと同様に、幾何学点の場合にはそれは形而上の《点》——《無限の点》——と見なされるのである。¹³⁾

次に最終的にはどうして幾何学が存在原理をシンボル化することが可能であるのかについて述べておきたいが、前述したようにそれは可能となるのは、点がその本性による持つ属性は存在原理がその本性による持つ属性——存在物の立場から見た属性——に対応してい

るからである。両者の対応関係は、主として次のような事実にある。

点が空間の原理である（空間は平面の移動として、平面は線の移動として、線は点の移動として考えられるとすれば、空間を形成する原点―出発点―は点である）。従って点が空間に対して持つ意味と、存在原理が全存在に対して持つ意味とは、同様のものである。例えば、点はその本性から空間を可能性として潜在的に内包するが、これは存在原理が全存在の可能性―《無状の状、無物の象》（老子十四章）、プラトンが言う《イデア》の意味での本質的原形など―を永遠及び不変の様態、言い換えれば原理の様態のもとに包含しているのに対応する。空間が点から生じると同様、全存在もその原理から《生じる》ものである。つまり、空間は点に内在する可能性の展開によってのみ存在するが、全存在はその原理が包含している可能性の展開によってのみ存在する。又、その展開の際に、空間の原理としての点は何らかの影響をも受けず、存在原理も又、その永遠性及び不変性において何らかの影響も受けないのである。さらに他の対応関係も見られる。

点に形がないものであるということは、存在原理の無形なる《存在》様態を反映する。又、点は次元も形も持たず、従って分割不可能であるが、それは、個別化不可能であり、部分を持たない存在原理の様態を反映する。それに、点が形を持たないものでありながら、空間での可能な形状全てを潜在的に包有するのは、存在原理が無形なるものでありながら《形》を持って個別的に存在し得る全存在を原理の様態において包有するのに対応する。

一方で、このシンボリズムにおける逆の対応関係は正に《大》と

《小》という、存在原理が持つ二つの様相を現す表現において見られる。即ち存在原理それ自体、そのあらわれていない様相は、原理の様態において全てを包有し、又、何ものもそれを包有したり制限したりすることはない故、至大のもの、《無限の点》である。ところで全存在に対するそのあらわれた様相は、少なくとも見かけには、至小のものとしてあらわれており、そのシンボルである幾何学的点¹⁴は、まるで量的にはゼロですらある。しかし、点が量的にゼロですらあるということは、全く何ものでもないということの意味するわけではなく、空間はそこから生じるものであるからである。このようにして幾何学的点、空間的・量的に《ゼロ》である点は、逆の対応関係、アナロジーにより原理的全体性に対応し、それをシンボル化する。

既に述べたように、如何なる中心そのものは先ずただ単に点である¹⁴。従って、《中心》、とりわけ《世界の中心》とされている《中心》―聖地、《世界の軸》としての聖山、曼陀羅の《中心》など―は、いずれも最終的には存在原理のシンボルである。そして数の一が形而上の《一》、又は幾何学的点¹⁵が、形而上の《点》と見なされる存在原理のシンボルであるのと同様に、《世界の中心》は、形而上の《中心》と見なされる存在原理のシンボルである。言い換えれば、唯一の真なる《世界の中心》とは形而上の《中心》であり、世界に位置するあらゆる《世界の中心》は、そのイメージに過ぎないのである。そしてこのようなイメージは存在原理のシンボルであるからこそ、言い換えればその聖性に関与するからこそ聖なるものの性格を帯びるのである。この事実を考慮して初めて、《中心》は「絶対的实在」

などを意味するという、エリアーデが述べた表現は明確になるが、それら表現全ての正当性は後にさらによく理解されるであろう。

ここで詳しく述べることはできないが、《世界の中心》を意味する幾つかのイメージについて触れておきたい。その一つは《世界の軸》の《上先端》、言い換えれば《太極》、又は《天門》であるが、それは《世界の中心》が世界の最上位にある《点》でもあるとされていることによるものである。¹⁶《世界の中心》のもう一つの重要なイメージは北極、そして特に北極星であるが、実際に両者も聖山、《世界の樹》、ピラミッドなど、《世界の軸》の極とみなされることは多い。¹⁷このような等価の表現は例えば、次の文章に見ることができる。

（古の聖王は）道（その形而上の様相）を得て（それに同一化したことよって）（それぞれが）崑崙、大山（《世界の軸》に
おり、…玄宮におり、北極（両者も《世界の中心》）に立つ。
莊子 『大宗師篇』）

くり返して言うが、北極星は何よりも先ず《世界の中心》、従って存在原理のシンボルであるが、このことは—シンボルの意味が多様である結果—その具体的な意味、即ち天球の中心であることを否定しない。むしろ北極星がこのような実際の位置にあるからこそ、言い換えればその本性によって《世界の中心》のシンボルと取り得るのである。¹⁸

3. 中心と円周。両者の関係のシンボリズム

——形而上の《一》と形而下の《多》——

《中心》が存在原理のシンボルであるならば、そのまわりに描か

れた円周は全存在のシンボルである。¹⁹この事実からして、円周と中心との関係は、（相変わらず）その本性により、全存在とその原理との《関係》に対応する。即ち円周は中心なしには存在しないが、中心は円周から独立して点として存在し得る。同様に、全存在はその原理がなければ存在し得ないのに対し、その原理は全存在から独立してその永遠及び不変の様態において《存在》する。又、中心と円周が、それぞれ存在原理と全存在を意味していることから、両者の関係は《一》と《多》（形而上の《朴》と形而下の《器》）の《関係》も意味している。

中心を持つ円周という図形は一見単純であるが、実際には様々な用いられ方をし、その都度異なった意味を持つものである。なかでも重要なのは、それが太陽のイメージと見なされる場合である。この図形は天文学で太陽の記号として、又中国語や日本語では、そのまま太陽の表意文字として用いられている。しかし最終的には、円周の中心としての太陽自体は根本的には原理のシンボルであること忘れてはならない。²⁰

中心を持つ円周の図形から生まれる最も重要なシンボルは車輪である。車輪と中心を持つ円周と比べる時、前者には後者にはない何本の放射状の線—輻—が加わる点異なる。輻によって、中心と円周の関係はより明確なものとなる。即ち、輻は円周は中心なしに存在し得ないことを意味する。輻の数は場合により異なるが、一般に特別なシンボリックな意味を持つ数が選ばれている。しかしいずれの場合にも、車輪は根本的には全存在のシンボルであり、より明確に言うならば、それは全存在を支配する生成のシンボルである。

円周は中心を回る点の運動によってのみ描かれる。車輪も又、文字・漢字から (oia、環、輪など) 明らかかなように回転を意味し、従ってアナロジーにより《万物》の絶え間ない変化を意味する。

車輪という語を伴う様々な表現も、この性格を語っている。インドや仏教における《物の車輪》、《命の車輪》、《法の車輪》、西洋古代の《運命の車輪》などの表現も、車輪のシンボリズムを一層明確にする。道家思想においては特に《環》、《輪》という表現がよく用いられているが、これに等価のものとして中国の伝統においては《流形》という表現も用いられている。この表現では形而下、全存在を特徴づける《形》の面が強調されているが、《形の流れ》もやはり、全存在の、又《万物》の変化を意味する。中心を持つ円周と同じく、車輪も又太陽のシンボルと考えられることがあるが、何よりも先ず、それは全存在のシンボルである。⁽²¹⁾

4. 不動点としての《中心》のシンボリズム

—— 不変性と無時間性 ——

車輪は固定点があつて初めて回転する。この時、運動を可能にしながらか自体は運動に参加せず、常に不動の状態にある点があつた一つある。それが車輪の中心である。同様に全存在は、その生成・変化を可能にしながらか自体はそれに参加せず、常に不変の状態にある《点》を必要とする。それが運動原理としての存在原理であり、唯一の不変のものである。この運動原理としての存在原理を、アリストテレスが言うように「動かずして動かすもの」(Motor immobilis) と呼ぶことができる。⁽²²⁾

車輪を動かすものは不動の中心であるが、以上に述べたようにそれ自体は次元を持たず、量的にゼロでさえある。同様に不可視な働きで《万物の輪》を動かす支配するものは不変の存在原理であるが、それも又《虚無》或いは《無》によってシンボル化される。不可視な働きで全存在を動かす Motor immobilis のすぐれたイメージとしては、老子の有名な十一章で見られる輪心(轂)のイメージがある。輪心はそれ自体一つの穴、一種の《虚無》に過ぎないが、不動の中心として回転を支配する。

三十本の輻(ふく)が轂(こく)に集まる。その無に(こそ)車輪の有用性(その回転する可能性)がある。(老子十一章)

ここで輻の数に関係なく、重要なのは、車輪の轂というイメージがアナロジーによって Motor immobilis、即ちそれ自体に動きに加わらずして《万物の輪》を動かす形而上の《無》を意味しているところにある。⁽²³⁾

一方で、中心の不動性存在の無時間性、言い換えればその《永遠なる現在》のシンボルでもあるのに対し、車輪の回転、或いは円運動は、全存在を特徴づける時の経過を意味している。⁽²⁴⁾

5. 中点としての《中心》のシンボリズム

—— 反対の一致の形而上の《場》 ——

円周に対して、中心は定義上の中点であり、即ち円周上のあらゆる点から等距離にある。従つて、中点としての中心は円周の対をなす二点の真ん中にあつて均衡の点である。それは又、円周を全存在としてみた場合に、円周上の反対・対立しているあらゆる要素が、

結 論

以上に述べてきたことを次のようにまとめることができる。

形而下の領域	形而上の領域
シンボル	シンボル化された実在
— 中心 —	— 存在原理 —
本性による属性	本性による属性
《ゼロ》《小》	全体性《大》、虚無
空間の原理	全存在の原理
形を持たない	無形
分割不可能	個別化不可能
不動	不変、永遠（無時間）
均衡	↕ 反対の一致

以上をまとめると、反対が存在する場合は円周、即ち全存在であり、その一致の《場》は、中心がシンボル化する《世界の中心》、形而上の《場》であるということである。反対の一致と中心との関係を明確にする文章は莊子の次の有名な文章であろう。

彼と是とその偶（対）を得るなき、これを道枢という。枢にして初めてその環の中心を得て、以て無極に応ず。（莊子『齊物論篇』）

（是非の対立がなくなる《場》を、《道の枢》（《世界の軸》）というが、この《枢》は移り変わる万物の環の《中心》にある。そしてそれは無際限の、あらゆる対立に適應される。従って、この《枢》を得るにより、初めて全ての対立を越えることが可能となる。

即ち《世界の中心》或いは《世界の軸》、言い換えれば形而上の《常の道》に同一化することにより初めて全存在におけるあらゆる対立関係を越え、自己の内に反対の一致を得られるのである。）

他の聖なる・宗教的シンボルがそうであるように、《中心》が人間の恣意に基づく取り決めではなく、それ自体の本性によるシンボルとなるという事実は十分に明確なことであろう。点としての中心が持つ属性のなかで決定的とも言えるのは分割不可能という属性である。存在原理の個別不可能という属性をアナロジーによって表現するもの、現象界に存在するものは点以外にはあるのだろうか（あると言ってもそれは数字のシンボルリズムにおける数の一しかないが、正にその理由で《点》と《一》のシンボルリズムが等価のものである）。そして存在原理のシンボルである他のイメージも、例えば太陽、北極星なども、最終的にはやはり、《中心》に帰するもので

ある。

しかし、前述したように《中心》のシンボリズムは、《中心》という言葉のみによって表現されるものではない。従ってそれを理解するためには《中心》という表現には、それに等価の表現、或いは又《中心》の様々な面・特徴を表す表現も考慮する必要がある。次の例は正にこのことを示している。

(聖人は)万国(諸界、全体のあらわれ)を兼ねて包み(その原理的状態で内的にそれを得)、是非輻湊(反対の一致してこれが轂(中心)と為るにあり(coincidentia oppositorum)の場である中心を得る)。静(不変性)に処り、中(心)を持ち(それに同一化し)、璇枢において(北極星を通る《世界の軸》に同一化し)(事物を)運(巡)らせ(Motor immobilisとして全てを動かし)、一(形而上の《一》の様態)を得ることによって万(物)を含む(内的に全てを原理的様態のもとに包含する)。(淮南子『主術訓』)

この文章は言うまでもなく聖人、「自己の《中心》への探求」を実現した者、言い換えれば自己の《中心》と《世界の中心》を一致にして両者を得た者のみに適用される。

以上で、《中心》の持つ複雑にして深淵な形而上学的意味は理解されると思われるが、形而上の《世界》を語るもつとも適切な《言葉》は聖なるシンボリズムであることに思いを致し、最後に《中心》についての莊子の含著ある一章を引用して本論文を閉じたい。

(聖王) 再相氏は環の中心に身をおき、万物はそのまわりで成し遂げられる。聖王は物の終わりも始めも知らなければ、瞬間

も時間も知らない。日々に万物の変化に(外的)関与しながらも、(内的)不変のものとして一体になっている。(莊子『則陽篇』)

注

- (1) 「《中心》のシンボリズムは、遙かに複雑なものであるが、われわれがここで参考した若干の様相からだけでも、われわれが明らかにしようとする目的は十分達せられる」。「Le mythe de l'éternel retour」 Gallimard 1969 p.29
- (2) "Traité de l'histoire des religions" Payot 1986 pp. 316, 318
- (3) "Traité..." pp. 320, 321
- (4) "Le mythe..." pp. 23, 31
- (5) "Traité..." p. 321
- (6) "Images et symboles" Gallimard 1952 p.49; "Traité..." p. 319; "Images..." p. 69; "Le mythe..." p. 33; "Traité..." p. 318; "Images..." p. 98
- (7) 「自然学は個別的存在を持つが不変ではないものを対象とする」W. Ross "Aristotle" Meridian Books New York 1959 pp. 66, 65. 「実存は固体的存在である」(existentia est individuorum) (スコラ哲学)。「形而下なる者はこれを器と謂う」(周易繫辭 上伝)
- (8) 《形》という概念を単なる幾何学的輪郭として理解してはならない。広義の《形》を持つものとはあらゆる意味で際限、制限を持つものである。ここではアリストレスを初めスコラ哲学が使う《形》(eidos, forma)を指さない。

(9) 存在原理として説かれていないにもかかわらず、仏教における涅槃という《存在》様態は同じ属性を持ち、——「全ての束縛から解脱することを涅槃という」——それも又形而上の領域を意味する。(11)で「束縛」とは最終的には、個別的存在それを自体を支配するものという意味)。

(10) 数学の定義上の中心とは、平面図、立体図における対称点ではなく、或る曲線上或いは曲面上の全ての点から等距離にある点、即ち円周或いは球面の中心を言う。

(11) 《反対の一致》(coincidentia oppositorum) は、ニコラウス・クサヌスが用いた本来この語の表す意味に解釈すればやはり、形而上の領域でのみしか起こり得ない。辻・直四郎氏は『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫一九七八年二七ページで「微より微、大より大 (coincidentia oppositorum)」という表現はウパニシャッドにも見られる」と述べているが、他の説明なしにそれは文字通り、即ち《至微》——アトゥマンのあらわれた様相——と《至大》、そのあらわれない様相とは《一致》しているという、いわゆる汎神論のような取り違えが起こりやすい。

(12) 辻・直四郎氏注(11) ページ二一五

(13) 《中心》は「天地創造が始まる点、そこからのみ創造が始められ得る点」を意味するとエリアーデが述べた、それは正に《世界の中心》が形而上の点として捉えられてからに他ならない。

(14) 全ての中心は点であるが、全ての点が中心であると言えない。しかし少なくとも全ての点は中心になり得ると言える。

(15) ここで、形而上の《点》(《中心》)と形而上の《一》は、存在原理が示す異なる表現に過ぎず、両者の間にある等価性に注目することが必要である。この等価性は、一方が幾何学的、もう一方が算術的な表現によつて表されている。なぜなら多に対応する一は必然的に部分を持たず、分割不可能な点に正に対応するからである。従つて《点》のシンボリズムと《一》のシンボリズムとを置き換えても、その意味するところには変わりはない。

(16) 「天極は世界の頂上であると同時に世界の《中心》そのものである。そこを《世界の軸》が貫く無限に小さい点である」エリアーデ Images, p.98。「《世界の軸》の」先端は、《中心》、そして同時に最高度の實在の超越感的点である」エリアーデ "Traité", p.318。「世界の中心」と《世界の頂点》が等価になるのは、世界そのものの二つの異なる図式——一方は諸界を、中心をめぐる同心円として、もう一方はそれを縦軸に垂直に交わる直線(或いは円錐を水平に切る横面の層)として——が存在するからである。

(17) 中国の伝統における《世界の軸》、北極星などに関する表現については、鐵井・慶紀氏の『崑崙伝説についての一試論——エリアーデ氏の「中心のシンボリズム」に立脚して——』『東方宗教』45巻・(一九七五年四月)三三ページ以下の論文を参照されたい。

(18) 一つのシンボルが様々な段階に解釈され得る例としては、朱子の『天地』の一節がある。ここでは漢字《天》は、文脈によ

り単なる物理的天、宇宙的《主帝》としての理、或いは形而上の、《常》の理に三通りの読みを持つ。言い換えれば三種の实在を意味することが明確に述べられている。

(19) 円周だけが描かれていることもあるが、その場合には円周は全存在をシンボル化するだけでなく、形而上の《一》、より明確に言えばその全体性が意味されていることは文脈から十分理解できる。

(20) インドの伝統では、聖なる書物の多くの箇所でのこのような誤りを戒める言葉が見られる（「太陽はブラフマンである。それは聖なる教えである」『チャンドッギヤ・ウパニシャッド』(2, 19, 1-3)。しかし神話や他の伝統的な教えがこのような表現を欠いていても、太陽のイメージを直ち《太陽崇拜主義》に結びつけるのは誤りである。

(21) 「既にペルシアのような古い伝統で宇宙は六本の輻と中心に臍のような大きな穴を持つ車輻と考えられていた」とエリアーデは述べているが、(“Oculisme, sorcellerie et modes culturelles” Gallinard 1978 p.36) 私の意見では《世界の軸》はおそらくこの穴を貫通していたのであろう。

(22) 「全て動く物は何者かによって動かされている。物を動かす第一の者は動かされていない。物を動かす第一の者は永遠にして唯一である。物を動かす第一の者は宇宙の唯一の支配者である。天も自然も全てもそれに依存する」。アリストテレス『自然学』(8. 4. 5-6)

(23) このシンボリズムを解釈して、マックス・カルテンマルクが

適切に次のように述べている。「輪心の虚無に集中している輻のイメージは、《多》を支配する至高《一》のイメージである」。

“Lao Tzu and Taoism” Stanford Univ. Press 1969 p.69 以上の

例（淮南子『主術訓』）を参考。

(24) 「《中心》に入ることにより、人は天地創造の瞬間を得、宇宙生成に先立つ無時間を体験する」。エリアーデ：“Traite...” p. 318 「しかし宇宙を、創造された世界を超越することで、人は時、時間の連続を超越し（スタシス）、即ち時間のない《永遠的現在》に到達する」。エリアーデ：“Images...” p.98

(25) これについてエリアーデは次のように明言している。「ブラフマンは全ての極、全ての反対・対立を併合する。時も永遠も同じ至高原理の示す二つの様相である」。“Images...” p.96（反対一致）(“coincidentia oppositorum”) という用語を始めて用いたニコラウス・クサヌスが、次のように述べている。「神は絶対的最大のものである。対立が生じるのは、現象を認める対象に限られる。絶対的最大の対立をも越えるものであり、対立とは無縁である。絶対的最大の無限である。そしてこの最大は最小と一致する。但し、ここで私が述べる最大と最小とは超越的な意味でもちいられている」。“De docta ignorantia” (1. 2-5)

(Liliana Trulas 筑波大学大学院哲学・思想研究科)